

東海の古代

第259号 2022年3月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

古代の宗像氏とその周辺

東海市 大島 秀雄

1. はじめに

福岡県にある宗像大社（以下、宗像社という。）の奥宮が玄界灘の沖ノ島にあり、この島から「海の正倉院」と呼ばれるほどの多彩で貴重な品々が発見され国宝に指定されていますが、4世紀後半に始まったとされるこの祭祀を神官の宗像（胸肩、胸形、宗形とも称する）氏が単独で行ったとするにはその目的と必要な財力からして疑問であり、宗像氏がヤマト王権の国家祭祀の一翼を担ったものとするのが通説です。

この通説の代表的な論考が篠川賢氏の「古代宗像氏の氏族的展開」（『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告Ⅲ』に所収、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議編、平成25年）であると思いますので、この論考の一部を紹介しつつ、古代宗像氏と関係がありそうな事項を提示し、古代史の一端を推測してみたいと思います。

2. 沖ノ島祭祀の主催者

『日本書紀』の記述から沖ノ島祭祀が国家祭祀であったとする篠川氏の解釈はおおよそ次のとおりであり、納得できるものです。

(1) 応神天皇三十七年条に阿知使主らが高麗国経由で高麗人と共に呉へ行き、呉王から縫女4人を貰い、応神天皇四十一年条に阿知使主らが呉から筑紫に着き、この時に宗像大神が工女らを欲しいといわれ、兄媛を大神に奉った。これがいま筑紫の国にある御使君の先祖であるとの記述に関しては、御使君の存在に注目し、宗像神の祭祀が天皇から遣わされた使いによって行われていたことを示唆し、この御使君氏は全国的に設置された御使部（三使部）の筑紫における伴造氏族（地方伴造）とみて間違いない。

ここにいう御使君氏は、宗像神に奉られた兄媛を祖とするというのであるから、宗像神の祭祀のために派遣された使者を接待する部を管掌した地方伴造とみるのが妥当であるとのこと。

(2) 履中天皇五年三月条～十月条にかけて、宗像神の怒りの神託が宮中にあったにもかかわらず、天皇は祈っただけで神に対する祭祀を怠ったため、天皇の妃（黒媛）が亡くなった。宗像神の怒りの原因は、かつて車持君が筑紫に派遣された際に、車持部を檢校し、三女神の「充神者」（神戸）となっていた車持部も奪い取ったためであった。天皇は車持君

の咎を責め、以後は筑紫の車持部を管掌してはならぬとしてそれを収め、あらためて三女神に奉った、との一連の記述に関しては、かつて車持部として王権への奉仕が義務づけられていた人々が、宗像神に神戸として寄進されていたことが推定されるということです。

(3) 雄略天皇九年二月条に天皇が凡河内直香賜と采女を派遣して「胸方神」の祭祀を行わせたという記述に関しては、これは、宗像神の祭祀が王権の主催する祭祀であったことを直接的に示す記事との理解です。

また、同三月条に雄略天皇は自ら渡海して新羅を討とうとしたが、行ってはならないという神の諫めに従い、紀小弓宿禰や大伴談連らを将軍として派遣したとの記事に関しては、この神とは宗像神であろうと推定されています。

3. 宗像氏系図の注目点

宗像氏系図の代表的なものとしては、『古代豪族系図集覧』（近藤敏喬編、東京堂出版、1993年）に所収のものがありますが、これによれば、天武天皇との間に高市皇子を生んだ尼子娘の父である胸形君徳善の先祖は未詳とし、徳善のひ孫の鳥麻呂になって初めて宗形神主と注記されています。

これは胸形君徳善の活動拠点が中央で、以後、この系統が宗像氏の主流になった為との解釈も成り立ちますが、在地の宗像氏は7世紀以前においては神事が主体ではなく、主に地域の支配者としての任に当たっていた可能性があり、これは沖ノ島祭祀の主催者が王権側にあったことと関連しているのかもしれない。

4. 水沼氏との関連

岩波文庫の『日本書紀(一)』の神代上の一書(第三)には日神の三柱の女神が宇佐嶋に降り、今は北の海路の中においでになり、これが筑紫の水沼君らの祭神であると書かれていることの注として、通証に「丹齋曰、胸肩氏為左座、水沼氏為右座」と記されています。

通証とは『日本書紀通証』のことで、1762年に刊行された国学者谷川士清の『日本書紀』全巻の注釈書で、丹齋とは忌部神道を唱えた江戸初期の忌部丹齋のことであり、室町初期の神道家で正平二十二年(1367年)に『日本書紀』神代巻を儒教的に解釈した『神代巻口訣』五巻を著した儒家神道の先駆者である忌部正通の説を受け継いだのが忌部丹齋とされていますので、この注の内容はある程度信頼が置けるものと考えます。

そうしますと、どこの水沼氏がいつ宗像社の神主になったのかですが、通説では筑後国三潯郡を本拠としていた氏族であり、『日本書紀』の雄略天皇10年9月条には、身狭村主青らが呉(宋のこと)から献上された鷲鳥を携えて筑紫に帰ってきたところ、その鷲鳥が水間君(水沼君)の犬に食い殺されてしまったとの話を載せているので、筑紫君磐井の父親の世代には既に筑後の勢力が博多湾沿岸に勢力を伸ばしていたと仮定すれば、それに従って筑後の水沼氏の系統が宗像社の神主になっていた可能性が考えられます。

『日本書紀』景行天皇十八年条では八女県に着いた時の従者に水沼県主猿大海がおり、『日本書紀』景行天皇四年条では国乳別皇子が水沼別の先祖とあるが、『先代旧事本紀』の「天皇本紀上」の景行天皇の項では50名の皇子の中に武国凝別命(筑紫水間君の先祖)と国背別命(水間君の先祖)の2人が記されており、どの皇子が水沼県主の先祖かは不明だが、県主とは、律令制が導入される以前のヤマト王権のカバネの一つであるとされているので、水沼氏は早くからヤマト王権に従属した在地の豪族だったのでしょう。

また、『先代旧事本紀』の「天孫本紀」に物部阿遲古連(水間君等の先祖)が見え、物部氏系図によれば物部阿遲古連は物部鹿火の従兄であることが注目されます。

磐井の乱を制圧したのが物部鹿火であり、『日本書紀』によれば継体天皇から筑紫よ

り西はお前が統治し、賞罰も思いのままに行えと言われた人物なので、物部阿遲古連は磐井の乱後に筑後国三潯郡に派遣されたものと思われます。

従って、物部阿遲古連を水間君の先祖とするのは『先代旧事本紀』の誤記と考えられ、この物部氏の後裔に水間君と姻戚関係を結んだ者がいたと解釈するのが正しいものと考えます。

筑後国三潯郡の高良社の初期の大祝が物部氏とされ、『宗像大社文書 第三巻』の「宗像大菩薩御縁起」には七戸大宮司事としてそのナンバー2に物部福實をあげており、この人物には「筑後国高良玉垂藤大臣ノ御乳子也」と注記されていることから、この記事内容が10世紀初頭頃と推定されるので、水沼氏の宗像社の神官の地位を縁者の高良社の神官である物部氏が継承したとの推測が成り立ちます。

5. 宇佐神宮との関係

上記4項の如く、『日本書紀』の神代上の一書（第三）には日神の三柱の女神が宇佐嶋に降り、今は北の海路の中においでになりと書かれていることは、宗像三女神が元々は宇佐の神であるように見え、現在の宇佐神宮の祭神は八幡大神、比売大神、神功皇后の3柱で、この比売大神とは宗像三女神（多岐津姫命・市杵島姫命・多紀理姫命）のこととしているのは、『日本書紀』の宗像三女神の記載に注目して、比売大神と宗像三女神を関連付けたものと考えます。

従って、宗像社も最初に祭られていたのは比売神であったと思われ、後に三女神に変更されたのだろうと推測されます。

この比売神を最初に祭ったのは福岡県田川郡香春町にある香春神社とされていますので、渡来系の秦氏との関係が想定されます。

上記4項の「宗像大菩薩御縁起」の七戸大宮司事のナンバー3には秦遠範をあげており、後に筥崎宮の宮司になったと書かれていますので、宗像社に比売神を持ち込んだのは豊前国の神官であった秦氏系氏族ではないかと思われます。

また、徳川光圀の命で編纂された『神道集成』巻一の系図の三女神の項では、田心姫命に「筑前国宗像郡胸肩神社」、湍津姫命に「豊前国宇佐郡宇佐宮」、市杵嶋姫命に「安芸国佐伯郡伊都伎嶋神社」とそれぞれ付記されているのは、三女神の本籍地がこれらの神社と信じられていた結果なのかもしれません。

聖武天皇の時代に駿河・遠江の久野氏の祖とされる神官の秦久能は、一時期、筑紫の大嶋にいたと久野氏の系図に書かれており、この大嶋には宗像社の中津宮があり、現在の祭神は湍津姫命ですので、『神道集成』に書かれている通りの神社から神官が派遣されてきたのかもしれない。

上記の七戸大宮司事の秦遠範は、秦久能の末裔と考えられている人物で、その先祖は秦河勝とされています。

6. おわりに

4世紀後半に始まった沖ノ島祭祀のきっかけは、石上神宮所蔵の七支刀の銘や、『日本書紀』神功皇后摂政四十六年～五十二年条の一連の記事にある百済との外交開始に求めるのが妥当とされており、時代的にも整合しています。

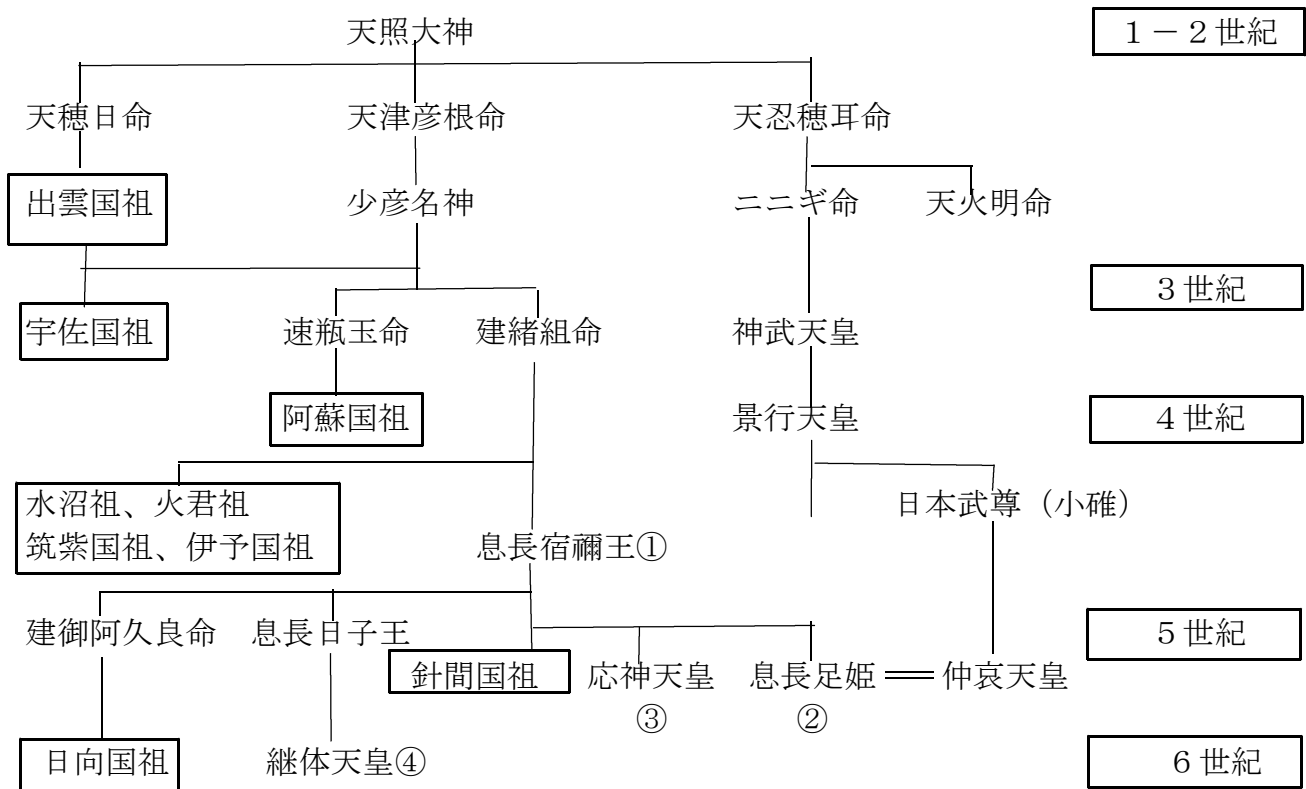
本稿では、宗像社の沖ノ島の祭祀に注目して神官の宗像氏とはどのような存在であったのかを検討してみた訳ですが、天武朝以前においては宗像氏と共に、筑後出身の水沼氏や物部氏が、さらに豊前出身の秦氏系氏族がヤマト王権の主催する沖ノ島祭祀を現地において中心的に担っていたのではないかと推定してみました。

息長系図から眺めた九州北東部の勢力と宇佐八幡宮

一宮市 畑田 寿一

息長氏については信頼できる系図などが存在しないことから色々な説が唱えられてきた。しかし、いずれも後世の仮冒とする批判に耐えられなく、定説が無い状態が続いている。しかし、5世紀ごろの日本列島の政治情勢を検討するには息長氏の動向は不可欠である。今回は数ある説の内、宝賀寿男氏の説『古代史の研究⑥息長氏』（青垣出版、2014年）を参考にさせて戴き、ヤマトと九州の関係をもとめてみたい。

1 宝賀氏が示す系図



① 息長宿禰王はヤマト周辺にいた彦坐王の子孫でなく、九州にいた建緒組命の子孫。

② 仲哀天皇の皇后は神功皇后でなく別人物で、神功皇后の三韓征伐は架空の話。

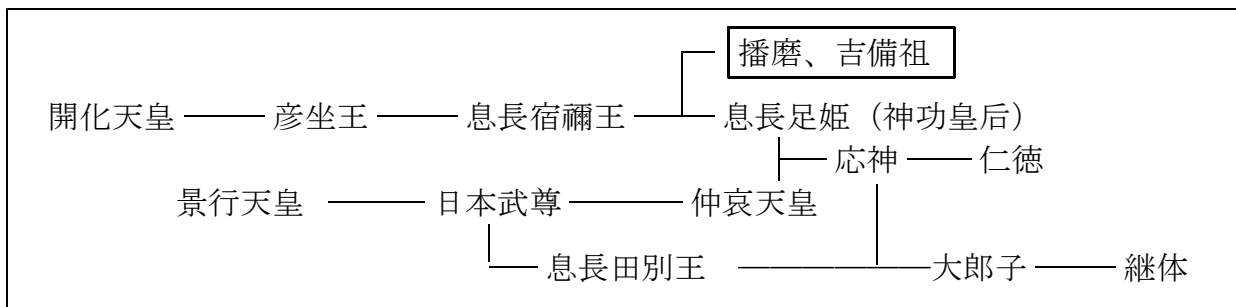
③ 応神天皇は仲哀天皇と息長足姫の子ではない。

④ 継体天皇の祖は応神天皇でなく、建緒組命の子孫。

以上が宝賀氏の説の概要であるが、九州北東部の数ある勢力の内、息長氏は独自の勢力を持っていたことが判る。(文責：筆者)

2 記紀が示す系図

一方、記紀では天孫族との繋がりを強調しており、播磨や吉備氏との繋がりは示されているが、九州の諸族には言及がされていない。息長宿禰王や息長田別王と天孫族との繋がりの信憑性、本拠地とされる近江の坂田郡に存在する山津照神社との関係など近江・越を発祥地とする説には疑問点が山積している。



3 建緒組命の活躍

建緒組命の祖の少彦名神すくなびこなは大国主と同時代の人物で、共に国造りをしたとされる伝説上の人物であり、4世紀頃の建緒組命は肥国か宇佐国の国造であったとする説が有力で、九州と出雲は関係が深かった。

活躍の地域には弥生時代に遡る下扇原遺跡（阿蘇牧尾地区）、うてな遺跡（菊池）、大岳遺跡（宇土）など製鉄遺跡が存在する。通説では3世紀に遡る製鉄遺跡とは認定していないが、筆者は阿蘇のリモナイトを使った製鉄遺跡と想定している。勢力の原動力は朝鮮半島との交易と製鉄であったのでは無いか。

宇佐国造については殆ど資料が無いが、御許山山頂の大元神社（宇佐八幡宮の奥宮）には磐座信仰があることや、古墳の出土品から4世紀後半と考えられており、また椿井大塚古墳（京都：4世紀）と同范の鏡が出土することから、「有明海—豊国—瀬戸内海—ヤマト」を結ぶ交易ルートが存在していた。

4 古墳からみた宇佐の勢力

宇佐付近の古墳を眺めてみると、3世紀末頃から赤塚古墳を始め大型古墳が造られ、5世紀の築山古墳では女性の首長と思われる人物が大量の朱とともに発掘されている。この地方は巫女の権威の強い地域であった。このことは宇佐八幡宮の中央に祀られているのは宗像3神であることから状況が推察できる。

一方、北部のみやこ町付近でも3世紀末頃から石塚古墳などが造られるが、最盛期は6世紀頃と思われる。通説では北部から開発が進んだとされているが、ほぼ同時期で、南部の方が急速に勢力を増したと思われる。南部には纏向型前方後方墳が存在しており、ヤマトとの繋がりが推察されるが、これをもってヤマトの勢力が及んだとする説には疑問が残る。

4 宇佐八幡宮との関わり

以上、3世紀後半から5世紀頃までの北九州東部の状況を眺めてきた。この地方は鉱物資源に恵まれ、有明海からヤマトに到るルートの中継点として、6世紀頃まで継続して繁栄していたことが窺われる。

通説では、当初、地方の豪族の宇佐氏が御許山に宗像三神を祀ってきたが、5世紀頃に辛島氏が秦氏と共に朝鮮半島から渡来し、更に7世紀にはヤマトから大神氏が進出して辛島氏に取って代わったとしている。しかし、この説では瀬戸内海交易ルートの開発や応神天皇などの存在が説明できない。宇佐八幡宮の「託宣集」などに頼り過ぎた結果では無いか。

6世紀の継体天皇期までのヤマトは群雄割拠の時代で、複数の勢力が各々天皇家の傍系と結びついていた。その中で、仲哀天皇の時代になると九州東北部は勢力を増し、瀬戸内海沿岸や播磨付近まで活動範囲を広め、天孫族傍系の応神天皇と結びついた。当時のヤマトには仁徳天皇が居り、応神天皇がヤマトを制していた訳ではなく、拠点も周防付近であ

ったと考えられる。一方、宇佐地方では辛島氏が持ち込んだ巫女を中心としたシャーマン信仰が花開いていた。

道教を中心とした文化・技術は7、8世紀の疫病治療に役立つと共に、占いなどの普及の源となったと考えられる。斉明天皇期の飛鳥での巨石文化や道教風庭園造りにその影響が読み取れる。

宇佐八幡宮の歴史を見ると725年に現在の場所に遷座したが、737年には伊勢神宮と並ぶ神威を持ち、749年の大仏建立時には宇佐神宮女禰宜が天皇と同じ紫の輿に乗ってヤマトに訪れるまでになった。その間ヤマトでは729年に長屋王の変により蘇我氏が滅び、藤原氏の天下となったことは無視できない。

宇佐八幡宮の祀られている応神天皇は4世紀末の人物であり、350年後に祀られるようになったのは「東の鹿島神宮、西の宇佐八幡宮」を活動拠点とする藤原氏の戦略の結果と考えられないか。

その後、鎌倉時代には宇佐八幡宮は武運長久を祀る神として崇められ、全国一の摂社を擁するまでに至った。この地方はヤマトと九州の関係を明確にする鍵であり、今後の更なる研究に期待したい。

九州北部の有名神社の成り立ち

刈谷市 酒井 誠

1 有名神社の成り立ち

(1) 宗像大社（世界遺産登録）

礼拝者は、漁業従事者が中心で、この地に伝わった宝物類を惜しげもなく奉納している。沖ノ島から全ての物の持ち出し禁止の状態が守られてきたおかげで、縄文時代までさかのぼる宝物類が出土している。今のような社殿もない3500年前の縄文時代から続いており、磐座や神体山を対象として祈りがささげられたものと思う。

- ・祭神：天照大神と素戔鳴尊の誓約で作られた宗像三女神
他の神社では必ずしも三女神が一体とはなっていない。
- ・創建：他の神社と同様に『日本書紀』の神話以上にさかのぼることはできない。
- ・磐座：①沖ノ島は、元宮であり、銅鏡、勾玉類（子持ち勾玉）、機織り機、狛犬類、国宝が豊富である。、森に入る前に禊ぎをして多数の磐座で祭祀を行う。
②中ノ島（大島）は本宮への中継地で中津宮である。
③辺津宮は、里宮で地元民が参拝できる。

(2) 英彦山神社（もともとは、日子山か？）

英彦山は、北岳、中岳、南岳の三つの峰があり、1199mの標高で、山形県の羽黒山、奈良県の熊野大峰山とともに日本三大修験道の聖地である。

古代の磐座信仰の存在するところに、神道や仏教が入ってきたために、特に仏教の密教と関連して成立した。現在は、聖護院や醍醐寺の配下に入っていると思われる。

- ・祭神：天忍穂耳尊（天照大神の子）、伊弉諾、伊弉冉
- ・創建：当初は修験道の寺院（寺）として創建し明治期に廃寺となった。
- ・磐座：玉屋神社は般若岩の玉屋窟に埋め込まれた神社で岩屋信仰である。

(3) 香春神社

香春岳には、一ノ岳から三ノ岳まであって、一ノ岳は、銅の採掘やセメントの製造で、ほとんど削られてなくなっている。ここで産出した銅で宇佐八幡宮のご神体の銅鏡を製造

し、奈良の大仏殿の銅にも使用している。

- ・祭神：辛国息長大姫大目命、忍骨命、豊比売命
- ・古宮神社（三ノ岳・村社）の祭神：応神天皇、神功皇后

（4）香椎宮

古代には、神殿はなく独特な建築用法である香椎造りの「廟」があった。墓なのか神霊なのかはわからない。

- ・祭神：仲哀天皇、神功皇后

2 宗像三女神は、元々別々の神

沖津宮、中津宮、辺津宮は、それぞれ^{たぎりひめ}田心姫神、^{たぎつひめ}湍津姫神、^{いちきしまひめ}市杵島姫神を祀る。

市杵島姫神を単独でまつる神社（弁財天との習合）としては次の神社がある。

間黒神社（名古屋市守山区）、冨部神社（名古屋市南区）、市杵島神社（刈谷市高津波町）
松尾大社（京都、中津姫）、高鴨神社（市杵島姫神社と大山咋神社併設）

3 各神社の成り立ちと磐座

それぞれの神社には、元宮と呼ばれる場所があって、古代ではそこで祭祀が行われ、やがてその場所に権力者によって社殿が作られて、名前をまとった神が安置された。

その神社の祭神と呼ばれる名前の付いた神の出現は、記紀からで、その後多くの神の名が創作され八百万の神の国となった。この時代に神道の原点が作られたと考える。神道は経典がなく宗教とは呼ばないという説もある。

4 九州北部の神社の近くにある磐座

- ①香春神社の磐座 ②宇佐八幡宮（大元神社・御許山麓） ③英彦山の磐座



- ④宗像大社の磐座



- ⑤壱岐の磐座（右側は猿岩）



⑥対馬の磐座(豊玉姫の墳墓) ⑧五島列島の磐座(野崎島の^{おえいし}王位石) ⑨長崎の磐座(桜谷神社)



八幡様

名古屋市 石田 泉城

八幡様は多くの日本人にとってなじみのある神様です。八幡神社、八幡宮と呼ばれるお社は、全国には4万社もあるとされますが、八幡様の由来は、はっきりしません。

八幡信仰の総本宮は、宇佐神宮で、そのご祭神は八幡大神、比売大神、神功皇后の三神です。宇佐神宮は、神亀二年(725年)に神社を建立し八幡大神が祀られ、天平三年(731年)に宗像三女神の比売大神が祀られ、さらに弘仁十四年(823年)に神功皇后が加えられ、その後、応神天皇が神格化され八幡大神と見なされたようです。

つまり、元々は八幡大神と比売大神の信仰であって、応神天皇や神功皇后は後付けです。

八幡は「やはた」と呼ばれ、幡を秦氏の「ハタ」とする秦氏説がありますが、「秦」の文字を「幡」に変える理由がなく語呂合わせの類いの説と考えます。宇佐は瀬戸内海航路の要衝の地で安曇氏を始めとする海人族の拠点であり、八幡は「数多くの旗」を意味した名称で大漁旗で帰港できるように海神である八幡大神を祀るとともに、宗像三女神や玉依姫になぞらえた比売大神を祀り航海の安全を祈願したのが始まりであろうと考えます。

前回の例会の話題

- ・乙巳の変以降の蘇我氏 一宮市 畑田寿一
- ・天武天皇の後 名古屋市 石田泉城
- ・懐風藻の分析 刈谷市 酒井 誠
- ・古事記と日本書紀の暦日 同 酒井 誠

例会の予定

■ 例会の予定 次回は日曜日に開催です!

- 1 日時 **3月20日(日) 13時半～**
- 2 場所 名古屋市市政資料館

■ 来月以降の例会

4/9(土), 5/15(日), 6/25(土), 7/17(日)

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)
toukaikodai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 3月28日(月)

■ 投稿文のテーマ

女神、女首長、女性酋長に関すること

年会費の納入

■ 年会費の納入について

- 1 年会費 5,000円(会報誌等送料込み)
- 2 納入期限 **2022年5月15日(例会予定日)**
- 3 振込先

募集中!

東海古代研究会の口座開設については手続きに時間がかかっていますので、下記の旧口座に振込をお願いします。

- ・金融機関: ゆうちょ銀行
- ・名称: 古田史学の会・東海
- ・店名: 二一八 店番: 218
- ・口座: 普通 1299395

ゆうちょダイレクトであれば、ゆうちょ銀行あて振替手数料は月5回まで無料です。